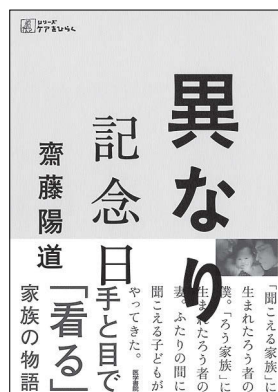


《シリーズ ケアをひらく》『異なり記念日』

愛おしき「ことば」の世界

著：齋藤陽道／定価：本体 2,000 円＋税
 発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



本書は、家族の日常を綴った物語であると同時に、良質な当事者研究の書である。ろう者の夫婦と、その間に産まれた聞こえる子ども、樹さんの生活が、独特の比喩を用いて豊かに表現されている。泣きそうになるエピソードや散りばめられた写真で描かれており、とても暖かくて少し切ない。

著者は、他者に向けて自分の意思を伝える手段として、意味や文法が定められているものを「言葉」、幼子が発するような声、踊り、絵画、動物の吠え声といった、意味に値することがむずかしいふるまいを含めたものを「ことば」として使い分けている。そのうえで、意味や利用価値を求めて「言葉」にこだわろうとすると、人間的な「ことば」を失ってしまう危険があると述べる。この概念を読んだときに、ふと閃くものがあった。

私は重度の認知症高齢者を多く抱える病棟で看護師をしている。乳幼児と認知症患者はどこか似ていると前々からぼんやりと思っていたが、本書を読んで、樹さんのする「きょとん」の表情は、そのまま認知症患者に当てはまることに気づいた。青年期や成人期、壮年期の多くの患者は「きょとん」をしない。目の前の相手に呆けた顔を見せないのは無意識の警戒とも、他者への気づかいともいえるが、自分を飾っていることに変わりはない。一方、乳幼児や認知症患者は自分を良く見せるための飾りつけをしない。その前では私たちも個を

隠せないし、だからこそルールの決められた「言葉」よりも、仕草や表情に重点を置き、全身で伝えたいことを表現する「ことば」が有効となるのだと思う。そしてその直接的なコミュニケーションのなかで感じた愛おしきは、膨らんだり分裂したりすることはあっても磨り減ることはない。だから著者の家では「すき！」という手話が飛び交っているし、私の職場では毎日仕事後には誰からともなく「今日の受け持ち患者の愛おしかったエピソード」の発表が始まるのだ。

本書は、ろう者が日常で感じる不便や困りごと、受けた教育による手話への意識の違いといった、聞こえない生活を具体的に表現しており、それだけでも非常に気付かされることが多い。しかし著者の感性の魅力は、「聞こえない」ことにあるのではなく、もっと本質的な聡明さと他者への愛ではないか。忙しい日常で失いがちな豊かさを、本書に突き付けられたように感じる。

切り取られた日常の何気ない場面には誰でも懐かしさを覚える一方、著者の感性によってもたらされる新鮮な驚きは、私たち読者を豊かな想像力の森へ踏み込ませてくれるだろう。秋の夜長の一冊として、ぜひお勧めしたい。